

群 教 セ	E03 - 03
	平17.231集

互いに認め合える温かい人間関係づくり

—— 2つの「ほっとルーム」の活用を通して ——

特別研修員 長澤 由美（太田市立駒形小学校）

《 研究の概要 》

本研究は、「2つのほっとルーム」を活用して児童にとって居心地のよい学校を作るための予防的・開発的な教育相談を組織的に行う支援体制を確立するためのものである。「ほっとルーム」では個別の相談活動を行う一方、学級集団づくりや異学年交流のための情報交換を行い、それぞれの学級の実態に応じた構成的グループ・エンカウンターなどを実施することを通して、互いに認め合える温かい人間関係づくりを目指すものである。

キーワード 【教育相談 ほっとルーム SGE 子育て支援セミナー】

I 主題設定の理由

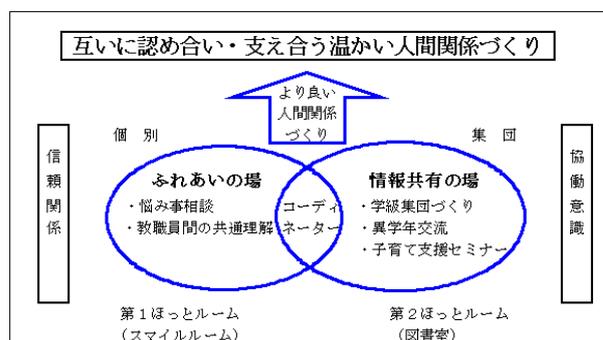
本校では、平成17年7月現在不登校児童はいない。しかし、過去に不登校になった児童は数名おり、現在でも不安定な状態は続いている。このほかにも、日常的に遅刻をする児童や、慢性的に腹痛を訴えたり、登校を渋ったりする児童もいる。また、不登校傾向ではないものの、友達とうまくかかわることができずに集団になじめない児童や対人関係に不安を感じている児童もいる。そして、この問題は学級内での人間関係の問題にとどまらず、休み時間の学年を超えたかかわりや、スポーツ少年団をはじめとする放課後の活動にも及んでいる。対人関係に悩みを抱える児童は精神的に不安定な状態にあったり、友達に対して自分の気持ちをうまく伝えられなかったり、相手の立場や気持ち・状況を考えた行動がとれないことが原因であると考えられる。対人関係スキルや社会的スキルが十分身に付いていないものと思われる。しかし、現在の子どもたちを取り巻く家庭や社会は、これらの力をはぐくんでいくのに適した状況にあるとは言い難い。つまり、日常生活の中で、子どもたちが自然に社会性を身に付けていくことは難しくなっているのである。

このような問題を受けて、現在の学校が求められているのは、学力の向上はもとより、児童が明るく元気に学校生活を送れる精神面での支援であると思われる。しかし、これらの問題に対応すべき学校では、十分な支援体制が確立されているとは言えない。個々の児童の問題行動に対する対

処療法的な指導にとどまっている傾向がある。

そこで、学校生活での不安や不満を解消し、児童にとって居心地のよい学校を作るための予防的・開発的な教育相談を組織的に行う支援体制を確立していくことが大切であると考えた。本校では2つの「ほっとルーム」をふれあい（個人への働きかけ）の場・情報共有（集団への働きかけ）の場と位置付ける。「ほっとルーム」を児童や保護者の問題に対して安心して相談できる場であり、教職員が共通理解を図り、児童にとって「居心地のよい学校」づくりを推進していく場として機能させる。これらの活動を通して学校全体で互いを認め合い、支え合える温かな人間関係づくりを支援していくことを本研究の主題とした。

図1 ほっとルーム構想図



II 研究のねらい

問題を抱える児童や保護者に対して予防的・開発的な教育相談活動を行う場として2つの「ほっとルーム」を設置し、ここを拠点とした組織的な

支援体制を充実することにより、互いに支え合い、認め合える人間関係を育成することをねらいとする。

Ⅲ 研究の内容

1 「ほっとルーム」の設置と運営

(1) 第1ほっとルーム

問題を抱える児童や保護者が相談できる場として各教室での相談活動とは別に常時開設している相談室として「第1ほっとルーム」（スマイルルーム）を設置し、相談活動を実施する。「第1ほっとルーム」では、3人の相談員（教育相談主任・ほっとルーム推進委員・悩み事相談員）が毎日昼休みに交代で常駐することで、児童が気軽に相談しやすい相手に安心して相談できる場と時間を確保することができるであろうと考えた。また、相談事例については、必要に応じてコーディネート会議で検討し、問題を解決するために支援チームを組織し、保護者や児童の問題に対して多面的な解決方法を考えていく。児童の抱える問題に耳を傾け、誠実に問題解決を行うことで、児童が安心して楽しく学校生活を送れるようにしていく。

(2) 第2ほっとルーム

集団への働きかけの場として図書室を「第2ほっとルーム」として位置付ける。「第2ほっとルーム」には悩み事相談員が常駐しており、「第2ほっとルーム」での児童の様子を観察し、個別に話を聞いたり、悩み事を解決したりしていく必要がある場合には「第1ほっとルーム」での相談を勧める。「第2ほっとルーム」を訪れた児童は、悩み事相談員の指導のもとに学年を超えた児童との交流をすることにより、より良い人間関係づくりの基礎を作ることができると考えた。また、必要に応じて各学級との連携を図りながら少人数での構成的グループ・エンカウンター（以下SGEと略す）やソーシャルスキル・トレーニング（以下SSTと略す）を行うことによってより良い人間関係づくりができると考える。「第2ほっとルーム」での実践に加え、ほっとルーム推進委員が中心に行うモデルクラスでのSGE・SSTの情報を「ほっとルーム通信」を通じて共有化し、必要に応じて各学級や異学年交流の場での効果的なSGEやSSTを行っていくものとする。

(3) コーディネート会議

コーディネート会議は「第1ほっとルーム」と

「第2ほっとルーム」という2つのほっとルームを効果的に活用するための会議として位置付けた。コーディネーター（相談主任）が中心となってほっとルーム推進員や悩み事相談員・関係職員で行う。問題を抱える児童に相談活動を通して直接かかわり合うと同時に学級での対応の仕方やその児童を取り巻く集団への働きかけを行っていきようにする。2つのほっとルームの活用を通して教職員が情報を共有化し、問題となる児童への個人指導や集団指導を進める中で協働意識を高め、職員間の協力体制を確立していく。

2 予防的・開発的な教育相談活動としての人間関係づくり

4年生のモデルクラスを中心に学校全体でSGEやSSTを取り入れた学級集団づくりを行うことによって互いのよさに気づき、認め合い支え合える人間関係をはぐくむことができるであろうと考える。異学年交流の場を人間関係づくりの場であるとともに実践の場と考え、学級で培った対人関係能力を異学年交流の場で生かすことによって、学級集団を超え、学校全体でよりよい人間関係をはぐくんでいきたいと考える。また、個々での実践が広く日常の学校生活でも生かされることをねらいとしている。学級内と異学年交流の双方で、SGEやSSTを行うことによって対人関係能力を高める教育的活動を計画的・意図的に実践することができるであろうと考えた。

3 「子育て支援セミナー」の実施

問題を抱える児童を持つ家庭においては、たくさんの情報がはんらんする社会状況の中で子育ての仕方について悩んでいる保護者が数多く見られる。共働きをはじめ複雑な家庭状況の中で子どもとゆっくり向き合う時間がとれなかったり、子どもの養育に対する関心が薄かったりする保護者もいる。親同士の間人間関係が希薄になってしまった現在では、何か問題が起きたときに気軽に相談できる相手が見つからずに問題が悪化してしまったり、早期解決ができずに深刻な問題へと発展してしまうケースもある。そこで、悩み事相談員による相談日を設定したが、重大な問題にならない限り気軽に相談に来ることは難しいのではないかと予想される。そこで、教育的な教育相談の場として「子育て支援セミナー」を実施する。保護者が子育てにつ

いての悩みを「子育て支援セミナー」を通して共有することによって、子育ての仕方には様々な考え方があることに気付くとともに、同じ悩みを持つ者として保護者同士が心を開いた関係づくりができるであろうと考えた。また、ここでの交流を通して保護者間の人間関係が深まったり、学校での教育相談に関心をもったりすることができるのではないかと考える。

IV 研究計画

2つのほっとルームの活用を軸にして、児童・保護者への相談活動を中心に学級づくりや異学年交流、子育て支援セミナーの実施などを計画的に組み込んでいくものとする。

V 実践

1 「ほっとルーム」の運営

「第1ほっとルーム」を新設し、昼休みを開かれた相談時間として設定した。オープン前から児童の関心は高く、「ほっとルーム」という名前は分かりにくいという意見が出され、公募して「スマイルルーム」に決まった。実際に活動を始めてみると、ほとんど毎日様々な問題を抱えた児童が訪れている。休み時間を友達と過ごすことが苦手な児童が中心になっているが、自分に自信がもてない児童、交友関係に問題が生じた児童、学級の雰囲気疑問を感じている児童など相談内容は多岐にわたっている。相談に訪れる児童は個人から5・6人のグループと様々だがゆっくり落ち着いて相談ができる場として児童の中に定着しつつある。3人の相談部職員が交代でスマイルルームに

表1 ほっとルームの運営計画

(※TCは、トレーニングセンターの略)

	情報共有の場	ふれあいの場
6	○学級の雰囲気把握する調査の実施。(モデルクラス) ○異学年交流(ふれあいタイム)グループ編成。計画と実施。 ○モデルクラスでのSGEやSSTの実施。	○「ほっとルーム」の新設と活動方針の検討。 ○問題を抱える児童についての情報交換。 ○保護者向け悩み事相談の開設。
	コーディネート会議	
7	○異学年交流(ふれあいタイム)実施 ○異学年交流(団組織の決定)	○相談活動の方法についての研修。 ○保護者全員に対する教育相談の実施。 ○教育相談実施後の情報交換と問題を抱える児童の洗い出し。
	コーディネート会議	
8	○教師を対象に対人関係育成のための研修を実施。(モデルクラスにおけるSGEやSSTの紹介。)	○保護者全員に対する教育相談の実施。
	コーディネート会議	
9	○全学級でのSGE・SSTの実施。 ○4年生を中心に異学年交流の場での実践。(運動会での低学年の世話) ○PTA子育て支援セミナーの実施。	○「ほっとルーム」での活動の紹介。 ○児童の抱える悩み事調査。 ○悩みを抱える児童の情報の共有 ○相談活動の実施。
	コーディネート会議	
10	○6年生による異学年交流の場での実践(1日TCでのリーダー)	○相談活動の継続。
	コーディネート会議	
11	○子育て支援セミナーの実施。	○相談活動の継続。
	コーディネート会議	
12	○5・6年生による異学年交流の場での実践。(もちつき大会での活動)	○相談活動の継続。
	コーディネート会議	

待機しているが、訪れたときに相談中のために相談できなかつた児童は、「相談箱」に「相談カード」を入れて帰り、

図2 スマイルルーム



予約を入れる。後日「連絡カード」を通して相談できる日時を児童に連絡する。1回の相談で問題が

解決されることは難しいが、多くの児童は「すっきりした。」と晴れやかな顔で帰っていく。困っている児童がいたら、「スマイルルームに行ってみれば？」と勧める声も聞かれるようになった。また、相談に応じている3名の職員に対しては、スマイルルーム以外でも声をかけてくる児童が出てきた。相談してみたいと思えるようになったようである。児童は「大した悩みじゃないけど」と言って訪れることが多いが、話を進めるうちに本質的な問題が表面化してくることが多い。相談内容については児童にとっては自力での解決が難しいものも多い。スマイルルームでの相談に関しては、定期的にコーディネート会議を開き、情報交換と共通理解を図り、必要な解決方法を探るとともに早急に解決できるように職員間でも働きかけている。

相談の際に心掛けていること

- 個人を尊重する。守秘義務を守る。
- できるだけ相談者の話に耳を傾ける。
- 児童が話しやすい雰囲気づくりをする。

児童の間では、「スマイルルーム」は安心して何でも話せる場として認知されてきている。

(1) スマイルルームを利用した児童の感想

- ・話をしたら、すっきりした。
- ・ゆっくり話を聞いてもらってよかった。
- ・心配なことがなくなった。
- ・先生が味方になってくれた。

(2) 相談にきた児童の事例

- 携帯電話のメールに怖いメールがはいってきたので、どうしてよいか分からない。
- 友達に仲間はずれにされてしまう。どうしたらよいか。
- 友達に悪口を言われたり、当番の時に仕事を押しつけられたりして嫌だ。

1 人間関係づくりとしての異学年交流・学級集団づくり

(1) 学級集団作り

モデルクラスの実態調査から自主性の許容が低く学級の不和が高いことが分かった。また、日常生活の様子からも場面緘黙児をはじめ自己表現が苦手な児童が多く見られる。そこで、SGEのエクササイズを活用した自己理解・他者理解を促進するとともにSSTをつかった話の聴き方や友達の誘い方などのスキルトレーニングを行った。

児童の感想

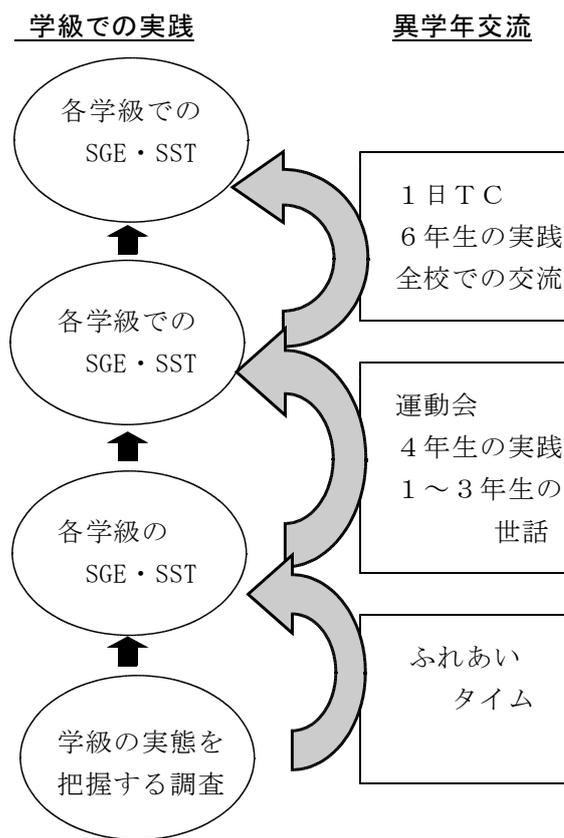
(友達を誘おう)

- 今日をきっかけにいっぱい誘おうと思った。
- いつも誘われない人に誘われてうれしかった。今度からは私もいろんな人が誘えそう。

(ふわふわ言葉とちくちく言葉)

- うれしいことは、言うと言自分がうれしくなるし、言われてもとてもうれしかった。
- イヤな言葉を言うといった人は「かわいそうだな。」と思った。

図3 異学年交流と学級集団づくりの関係



(2) 異学年交流(運動会)での児童の感想

ア お世話をしてもらった1年生の感想

- お兄さんにバンダナをしてもらった。
- トイレに連れて行ってもらった。
- けがをしたときに「だいじょうぶ」って言ってくれた。

- はちまきがほどけなかったときにほどいてもらった。
- リレーに行く時に「こっちについてきて。」って言われた。

イ 低学年の世話をした4年生の感想

- けがをした子がいて保健の先生のところに連れて行ったら、けがをした子に「ありがとう。」といわれてうれしかった。お世話をするといいこともあるなあと思いました。
- 綱引きの出番の前に「次は、綱引きだよ。早く行かないと遅れるよ。」って教えてあげた。間に合ってよかった。
- もうすぐ本番なのに、入場行進でぼくと手をつないでいる下級生がうるさくて大変でした。少しの時間でも大変だなあと思いました。
- ぼうしをかぶせてあげた。1年生がうれしそうに顔をしていたから、こっちもうれしくなった。
- とても疲れました。昼休みにアスレチックで遊んでいた子がいたので注意しました。低学年は小さい子なので、高学年が注意しないとだめだなあと思いました。
- あまりお世話ができませんでした。暑いからぼうしをかぶせてあげたり、トイレと一緒に連れて行けばよかったなあと思いました。お世話をしている人を見て偉いなあと思いました。

(3) 異学年交流から学級集団づくりへ

異学年交流の場での実践に向けて各学級での実践を行っていった。しかし、各学級の学級集団の状況の違いやSSTのトレーニング状況の違いのため、異学年交流の場での活動にも差が見られた。そこで、異学年交流の場で中心的な活動をする機会のある4年生と6年生のすべての学級において学級の状況を調べるためにQ-U検査を実施し、学級づくりに役立てることにした。

3 子育て支援セミナー

(1) 第1回子育て支援セミナー【9月29日実施】

対象者 PTA 36名

「子どもと家族のかかわりを考えよう」

参加者それぞれが、自分の家族の関係を見つめ直し、家族内での力関係や結び付きの強さ、誰の方を向いているのかなどを見つめたうえで、今後どのような関係になるとよいか、そのためには家

族に対してどのように働きかけていけばよいのかを考えるセミナーを実施した。

ア 参加者の感想

- 今日セミナーに参加して改めて家族のつながり・かかわり合いを大事にしていきたいと思いました。
- 家族の結びつきは自然に生まれるものではなく、努力が必要だということを実感しました。とてもすっきり、すがすがしい気持ちになりました。

(2) 第2回子育て支援セミナー【10月26日実施】

対象者 1・4年児童100名とその保護者

「親子、みんなで楽しめる夢の遊び場を作ろう」

1年生と4年生の児童それぞれが4名程度のグループに分かれ、その保護者を加えて8名程度のグループで粘土作りの活動をした。児童は

図4 第2回子育て支援



それぞれが楽しめる夢の遊び場所を思い描き、そこにあるといいと思うものを作る。4名の児童がそれぞれ海や山、動物園などをイメージし、そこにあるものを作るのに対して、児童が作ったものをすべて置ける一つのまとまりのある場を保護者が協力して製作するセミナーを実施した。

イ 参加者の感想(児童)

- お母さんや友達と粘土作りができて楽しかった。自分で作るのよりすごくいいのができてうれしかった。
- あんまり話したことがなかった友達やお母さんたちと話ができてよかった。
- 今まで少ししか話したことがない友達と仲よくなれた。

ウ 参加者の感想(保護者)

- 楽しく参加させていただきました。そんな中でも「場所の提供」を子どもにする親の立場、考えさせられました。
- なぜ4年生のこの時期に粘土遊びなの？と初めは意外な気持ちでしたが、子どもと一緒に粘土をしながら子どもの表情を見て最近色々忙しくて子どもと一緒に何かをするということが少なく、何を考え、どうしたらよいのか考えさせられました。今回のセミナーは、大変良かったと思いました。有意義な時間が過ごせました。

○今までお話しする機会のなかった方とも、子どもを交えての共同制作ということでスムーズに楽しく過ごすことができよかったです。グループで何かを成し遂げる心地よさを久しぶりに感じました。

○子どもと2人きりになるとついつい親の意見を押しつけてしまいがちですが、他のお子さんやお母さん方と一緒に話し合いながら1つの物を作るのがとてもよかったです。

4 考察

ほっとルームを開設する前は、ほっとルーム(後にスマイルルームと名付ける。)に果たして相談者が来るのか、相談を目的としない児童がスマイルルームを訪れて、遊び場所になってしまうのではないかと心配された。職員の中でも相談室が本当に必要なのかと疑問を抱く声も聞かれた。職員間の認識の差が大きかった。

しかし、実際にスマイルルームを開いてみると、悩み事のある子が連日訪れている。スマイルルームは、昼休みに毎日開かれているために、児童が悩みを感じたときにいつでも相談できるという安心感があり、早期に解決できたために問題が深刻にならなかつたケースも少なくない。大人にとってはささいな問題でも、子どもには解決の糸口が見つからないこともあり、相談に乗ってもらうことによって晴れ晴れした顔で部屋を出て行く子が多い。また、友達とうまくかかわれない児童が友達の誘い方や仲間に入る方法を教えてもらうことにより、友達遊びができるようになった例もある。けがをしても声も出さなかつた場面緘黙の児童が、友達の相談の付き添いで何度もスマイルルームを訪れているうちに話に参加し、いろいろな話をする中で、次第に声も大きくなり、今では教室はもとより、職員室でもはっきりした声で用件を伝えられるようになった例もある。スマイルルームでは、身体の発達のことを同性の先生に相談したり、自分に都合の悪いことは知られていない先生に相談できるところがよかつたのではないかと考えられる。男性1名(特学担任のコーディネーター)と女性2名(学級担任を持つほっとルーム推進委員・担任外の悩み事相談員)の3人の相談担当が計画的に相談活動を行うことにより、児童は悩み事の種類に応じて相談相手を選ぶことができるうえ、第2ほっとルームでは、予診的な相談や経過観察なども行うことができた。

各学級ではQ-Uの結果をもとに2つのほっとルームでの情報を活用して実態に応じたSGEやSSTのトレーニングを行い、よりよい人間関係づくりに取り組み、すべての児童にとって居心地の良い学校づくりを目指して実践を重ねている。

また、子育て支援セミナーの実施によって保護者間の人間関係づくりができるとともに、参加した保護者が様々な考え方に触れ、視野を広げながら相手や子どもの立場に立ったものの考え方ができるようになってきた。セミナーをきっかけに個別相談に訪れる姿も見られるようになった。

VI まとめと今後の課題

はじめは相談室の在り方に疑問を抱いていた職員も相談室(スマイルルーム)の活用状況を見るうちに変化が見られるようになった。児童がスマイルルームを訪れ悩みを相談していく中で、明らかになった悩みや子ども同士の人間関係など教師の知らなかつた問題を共有化することは教師の意識変容につながつたようである。また、これらの問題を解決していくことで教職員間の協力体制が確立され、問題を抱える児童への個人指導や集団指導を進める中で職員間の協働意識も高まつてきたと考えられる。

2つのほっとルームの機能的な活用のためには悩み事相談員の活躍が不可欠である。悩み事相談員が第2ほっとルームでの児童の様子を細かく観察する中で、知り得た情報をコーディネート会議で共有し、綿密に対応策を考え、第1ほっとルームでの相談に生かすことになる。2つのほっとルームを機能的に活用することによって、ほっとルームが形骸化せず、子どもたちの本音を話せる場として存在できるのではないかと考える。

そこで、コーディネート会議を頻繁に開くことが必要になる。しかし、コーディネート会議を実施する際、勤務時間の違う悩み事相談員を含む教職員が、相談する時間をどのように設定していくかが今後の大きな課題となっている。

〈参考文献〉

- ・「エンカウンターで学級が変わる 小学校編」
 國分 康孝監修 図書文化社(1996)

(担当指導主事 武藤 榮一)